



2. 患者としての猫

猫とはどのような動物だろうか？猫の行動や犬よりも扱いにくい、と感じるのはなぜだろうか？猫を扱う上で、どう影響するのだろうか？この章では、動物病院での行動や、獣医師および動物看護師の対応、さらに飼い主が実は誤解している事項について検討する。ストレスによって、多くの臨床検査の信頼性やその解釈だけでなく、病気の徴候や治療の反応性にも影響を及ぼしてしまふ。また、猫の家庭環境や飼育環境は、病院での診察にも影響を及ぼすことがある。猫の習性について、以下

のように説明することができる：

- ハンターであり肉食動物である
- 捕獲した獲物を、少量ずつ分けて食べる
- なわばり意識が強い
- 香りやニオイに非常に敏感である
- 「清潔好き」である
- 自立心が強く、感情的、且つ警戒心が強い
- 幼少期の経験に大きく依存している

もし猫の行動を動機付ける要因が理解できれば、様々な状況下で猫の扱いが容易になる。特に動物病院内で診療する際により実感できるだろう。

ハンターであり肉食動物である

猫はげっ歯類や他の小動物の捕食者として、身体的にも行動学的にも進化をしてきた動物である。食物連鎖の頂点に君臨し、視覚、聴覚および嗅覚を駆使して獲物を捕らえている。猫は優れたハンターであり、獲物が主に活動する夜明けや夕暮れに自身のなわばり内を徘徊し獲物を見つける。猫は生粋の肉食動物であるため、生きてゆく上では肉のみに存在する栄養素の摂取が必要となる。

動物病院として考えるべきことは？

- 猫は優れたハンターであるのと同時に、危険な状況から身を守るための、察知能力が発揮さ

れる。咬傷および引っかき傷による感染のリスクは高く、ケンカを極力避けたい。そのためにも猫が恐怖や防衛による攻撃を起こさせないような接し方を身につける必要がある。

- 野菜食やドッグフード、手作り食や生の食事など不適切な食事を与えられている猫は、重度の栄養障害に陥る可能性があり、場合によっては致命的となる。
- 猫は肝臓による代謝が犬とは異なるため、効率的に代謝できない薬物や化学物質が存在する。そのため、その毒性が犬と比べて強くでることがある。

飼い主が知っておくべきことを以下に示す：

- 飼い主がたとえどんな倫理的概念があろうと、猫は肉食主義にはなりえない。猫は完全な肉食動物であることから、肉から必要不可欠な栄養素を摂取している。
- 猫にとって必要な栄養要求を、過不足なく手作り食で満たすことは実質的には極めて困難といえる。高品質の市販の食事(ロイヤルカナンが提供している猫用フードなど)を用いることがより確実である。
- 猫はライフステージごとに栄養要求量も異なるため、それぞれのステージにあわせて設



計された食事を与える必要がある。

- 子猫は成長とともに、狩猟能力を身につける。そのため乱暴に遊んだり、人の手や足を攻撃するような遊びは大人になっても続くことから、成長するにしたがって飼い主がケガをする危険性がある。
- 猫は夕暮れや早朝に活発になるのは至極自然である。そのため、食事や遊びを求めて飼い主を起こしてしまう場合がある。
- 獲物を屋内に持ち込むことがある。
- 狩猟本能を満たしてあげるような、遊びが必要である。

捕獲した獲物を、少量ずつ分けて食べる傾向がある

一般的に、飼い猫の食事方法として、1日2～3回または常に自由に食べられるような環境である。野良猫の場合、獲物を狩って食べるためには多くの時間を費やすことから、野良猫は一日中（ときには夜も）、少量頻回に食事食べている。また、野良猫は一日を通して、10～20回の

少量を食べていることが知られている。そのため決められた食事時間や、常に食物を食べられるという環境は自然ではない。



もし猫の行動における動機付けや方向付けを理解することができれば、いかなる状況下においても、容易に猫のケアを行うことができます。このことは、動物病院でより一層求められていることでしょう。

猫にとって食事は、究極の生存源と言えるだろう。環境が許せば、猫は単独で獲物を探し、捕獲し食べる。母猫が子猫に狩りの技術を学ばせるために行う場合は例外であるが、本来食事や狩りは単独で行う。飼い猫の場合は避妊・去勢手術や不自然な生活環境に

よって、食事のスタイルが大きく変化してしまっている可能性がある。

猫に十分な飲水を促すためには、本来の飲水行動を理解することも重要である。野生の猫は、比較的水分含有量の高い獲物を食べている。しかしそれでも飲水の必要はあり、腐った肉によって水が汚染されている可能性があるため、猫は食事をする場所の近辺の水は飲まないようにしている。

動物病院として考えるべきことは？

- 猫の肥満は、飼い主が猫本来の食性を正しく理解していない

ことに起因することが多く、ときに深刻化する場合がある。

- ドライフードは歯の健康の維持や、またわざと隠して猫に探し出して食べさせるということもできる。
- ドライフードのみを与えられた猫では、食事から得られる水分量が少なくなる。病気によって、水分摂取量を増やすことが大切であり、場合によってはウェットフードも有効である。

飼い主が知っておくべきことを以下に示す:

- 猫は人と違って大量の食事を1日に1度が2度摂ることに適していない。そのためドライフード（例：ロイヤルカナン 猫用シリーズ）を用いて、少量頻回の食事を与えることが理想である。フードパズルやフードト

イを用いることで、一度に大量に食べてしまうことを避けられるだけでなく、隠してある食べ物を見つける刺激を与えることもできるだろう。

- 猫は一度に大量に食べないため、少し口にしてその場を立ち去ることも多い。食事を全部食べきらないようであっても、より美味しい食事に切り換える必要はないが、体調が悪いこともあるので注意する。また、猫の新しいものを好む性質があり、飼い主がより猫が好みそうな味の食事に変えることで、最初は食物摂取量が増える。しかしながら、また食べなくなると新しい食事に切り換えることを繰り返すことで、目新しさゆえの食物摂取量増加により肥満になってしまうことがしばしばある。



写真: Yves Lancelu

- 人と違い、猫にとって食事という行為は社会的交流の手段ではない。猫が飼い主の足に頬をすりつけたり鳴いたりする行動は、空腹のため食べ物を要求しているというよりは、飼い主と交流をしたがっている仕草と言える。しかしこの仕草を飼い主が誤って「食事を要求している」と解釈してしまう場合が多い。その結果食事を与える量が増えることで、食べ過ぎに伴う肥満のリスクを増大させることになる。

- 猫は単独で食べることを好む。複数の猫がいる家庭では、どの猫も自由に食事をとることができるように、食事場所を複数設ける必要がある。同居している猫同士が、食事の時間に一緒に来る様子は良好な関係のサインとして捉えられることが多い。食事が飼い主によって与えられている場合、一定時間は食事をする場所を共有する必要があるためである。猫たちの関係によっては、食事が終われば猫間の緊張レベルをかえって高めてしまう場合がある。

- 食事を与える場所も、非常に重要である。部屋の隅の方だとそこまで近づくことが困難になる。キャットフラップ（猫用出入口）付近は、食事中に他の猫が急に入ってくる恐れがある。また、ガラス扉付近は他の猫から丸見えになってしまうため、急いで食べる習慣がついてしまう可能性もある。そして大きな音がする電化製品付近も、猫にとって決して快適な場所ではない。

なわばり意識が強い

「なわばり」という用語を大雑把に使用することが多い中、行動学的用語においてなわばりとは、猫が防衛のために確保している領域のことを指す。さらに、なわばりの外で猫が日頃生活している領域として「行動圏」が存在する。これらの領域は固定されておらず、状況に応じて広がったり、狭くなったりする。野良猫が生きてゆくためには、このなわばりや行動圏の広さが重要になる。そのため常に猫はこれらの領域に、他の猫が侵入することを用心深く警戒している。伴侶動物としての猫は、飼い主に食事を与えられており生きるために狩りをする必要はない。しかしながら、なわばりや行動圏を確保するため、狩りをしたいという本能が残っている。

例え飼育環境下においても、なわばりは猫の行動に大きく影響する。同じ家で生活している猫同士でも1つの社会集団を形成しないことが多く、お互いに対抗意識がある猫同士では食事やなわばりを巡って争いがおこる可能性がある。

種の保存において繁殖活動は、最も重要である。通常、雄猫の行動圏は雌猫の行動圏よりもはるかに広い（通常3～10倍）。例えば郊外に住む雌の飼い猫のなわばりは、自分が生活している家の庭くらいの範囲であるのに



対し、未去勢の雄猫の行動圏は、近所の家数件分の範囲にまで及んでいることがある。

都市で生活し豊富な食物さえあれば、野良猫は1ヘクタール当たり75匹以上の比較的高い密度での生活に耐えることができる。同じような都市環境で飼育されている猫は、1ヘクタール当たり120匹を超える密度で生活していることがしばしばある。

家庭では猫は定期的に食事を与えられ、この屋内の環境が彼らのなわばりとして安全な領域である。しかし、彼らは家の中と外側の区別ができないので祖先と同じようにニオイ付け行動を行う。猫は自分のなわばりをマ

ーキングするために、身体を擦りつけたり、引っ搔く、尿をスプレーするなどの様々な方法を用いる。マーキングの目的や感情によっても、その方法は変わってくる。

動物病院として考えておくべきことは？

- 屋内で複数の飼育猫が暮らしている環境中で、ある猫が創傷やそれに伴う膿瘍が出来てしまった場合には、家庭内の猫同士が仲良く暮らせていない可能性がある。
- 猫のなわばり意識は強く、近所の他の猫を攻撃してしまうということで動物病院へ相談にくる場合もある。特になわばり意識が非常に強い猫は、他の猫のなわばり内にも侵入し、その領域を使用させないようにしたり、追い出そうとしたりすることがある。ときには家の中まで侵入し、先住の猫だけでなく仲裁に入った飼い主まで攻撃する場合がある。そして立ち去る前に、マーキングのためにスプレーをすることもある。
- なわばり意識が強い猫が他の猫と同居している場合、ケンカによる外傷やストレスが引き金となって、特発性膀胱炎などを発症し動物病院を受診する場合がしばしば見受けられる。
- 猫は自らのなわばりの外にいてただで安心できず、動物病院のニオイや音、眼に入ってくるものに対して非常に強い不安感を覚え、怯えたり、身構えたりする。

飼い主が知っておくべき項目を以下に示す:

- 猫は飼い主とよりも、なわばりをつながり強く持つ。その結果、引っ越しをした場合、引っ越した家が近距離のところであればもとの古い家に戻ってしまうこともある。
- 猫は必ずしも同居猫に対して、寛容になれるとは限らない。飼い主は猫が寂しがるのもう1匹「友達」として猫を迎えようとする考えかもしれない。しかし、猫同士が昔から同じ社会集団で生活していた訳でない為、先住猫にとってみると新入り猫はただの「脅威」でしかない。
- なわばりの問題があるために、猫は恐れを感じ、隠れるために外に出ることを避ける場合がある。しかし飼い主は、ストレスによってこのような行動の変化やストレス関連問題に気がついていない可能性がある。
- キャットドアを利用することで、飼い主は猫の出入りを管理できるようになる一方で、他の猫が家の中に侵入してくる可能性もある。キャットドアは、居住している猫のみが入れるようにマグネットやマイクロチップなどの「鍵」を利用するのが理想的である。また一部の猫にとっては、安心できるなわばりは家の中でも一部の狭い区画だけであることもある。
- 猫のなわばりを屋内に限定する場合には、飼い主は家の中を猫が探検し、食事や水に自由にアクセスできる環境を整え

る必要がある。ドアの周辺は落ち着いて過ごすことができず、ベッドの下がなわばりとして好まれることが多い。また高い場所にある休憩場所を用意してあげることで、室内猫のなわばりの安全性を確保できるでしょう。

- なわばりの外側ではなく内側でなわばりを示すためのニオイ付け行動（スプレー行動、排尿、排便、爪とぎ）を行う場合は、猫がその領域を安全だと感じていない可能性がある。
- 猫が自発的に、行動圏を離れることは稀である。それゆえ、ペットホテルや動物病院を利用するときなどどうしても猫を預けなければならないときには、飼い主は猫のことを考えて選択する必要がある。ペットホテルであれば、猫の行動において、必要なものを満たしているか？動物病院であれば猫の要求や不安を考慮してくれるスタッフはいるか？キャット・フレンドリーな動物病院であるか？などを考慮するべきだろう。

臭気に強く影響を受ける

猫は社会的コミュニケーションの手段としてニオイを用い、通常はそのニオイを他の猫と距離を保つことに利用している。(例外として、仲間を探す場合、なわばりの中心領域にニオイを付ける場合、雌猫グループの一員であることを認識するためなど)猫は、フェロモンや顔および身体にある腺だけ

でなく、尿や糞便もニオイ付けるに利用している。

猫の口唇および顎、頭頂部、尾根部、指の間および肛門部周辺には臭腺がある。猫が飼い主に身体を擦り寄せたとき、その部分には猫特有のニオイが残っているだろう。同様に猫が同じ方法でなわばりにある枝や小枝、他のものにマーキングをしている。また猫は木や囲いで爪研ぎをすることで、視覚的な目印と肉球の間の臭腺に由来するニオイをつけている。未去勢の雄猫の尿は、刺激的なマーカとなるだろう。

性別や不妊手術の有無に関わらず、すべての猫がスプレー行動を含むニオイ付けの行動を行う。尿のスプレー行動の頻度やパターンは複雑であり、ニオイ付け行動の一環として、糞便を隠さないで残しておくことがある（糞の山）。

食料が豊富にある地域の野良猫や、農場で自由に生活している猫達の集団で認められるような「自然な猫」のグループでは、概してグループ内で互いに擦り寄り合ったりグルーミングし合ったりすることにより、個々が結び付きを強め良好な関係を築くことが往々にしてある。（そして雌は子猫を集めて、子育てを協力しあうことがある）。

猫同士が互いに擦り寄り合うことで、互いのニオイを交換し



「グループのニオイ」のプロファイルを作成する。猫はどのようなニオイに属するのかわかることによって、互いが社会的グループの一員であることを認識する。自然に形成されたグループ内では、お互いに攻撃しあうことは少ない。しかしグループの外の猫が侵入してきたり、彼らのなわばりで狩りをしようとしたりすると、これらの行動は食料や水を奪われるという脅威を意味するため、グループで（通常すべて血縁関係がある雌猫）よそ者の猫を追い払うため攻撃を加えることがある。

動物病院にとして考えておくべきこととは？

- マーキングを含む問題行動はよく見られるが、その原因を特定し飼い主に効果的なアドバイスをするには時間を要する。基本的な飼育環境の改善で変化が認められない場合は、行動学の専門医の紹介か専門医からのアドバイスを受けるべきである。不適切な排尿がある場合、内科的な疾患の除外のための尿検査が必要である。
- 動物病院では、慣れ親しんだニオイがないので不安感がとても高まる。

- 衛生上、手洗いや、診察台を拭くことは必要不可欠であるが、他の動物のニオイを除去するためでもある。
- 猫が入院しなければならない場合、その猫が家で眠ったり休んだりしている寝床（マットや毛布など）を持ってくることができれば自分自身のニオイがしみ込んでいるので、入院中のストレスが軽減されるだろう。キャリーの中に敷いてあげるのも良いでしょう。
- 家と動物病院の両方に猫のフェイシャルフェロモン（フェリウェイ®、ビルバックジャパン株式会社）の使用が効果的である場合もある。
- 強力な消毒薬では、使用後のケージを消毒するには過剰となる可能性があるが、洗浄し十分に乾燥させてから猫を入れましょう。



クライアントが誤解していることとは？

- 嗅覚と言うのは食べ物にアプローチするための最初のとっかかりであり、おいしそうなニオイがなければ、口をつけようとさえしない。上部気道感染症などの疾患では嗅覚が損なわれ、猫の食欲が低下する場合がある。高脂肪食を用いたり、食物を人肌まで温めることで、香りをたたせ食欲を引き出せる。

- 猫の生活環境における、慣れ親しんだ安心感のあるニオイの

変化は大きな問題となりえる。例えば、家庭用洗剤、芳香剤、新しい家具、来客または犬、猫の出入り口から入って来る他の猫などが原因で家のニオイが変わってしまうことがある。急に問題行動が発現した場合、こうした環境変化がなかったか疑ってみる必要がある。

- 屋内でのニオイ付け行動は、猫が汚れを気にしているからではなく、感情の変化に伴った反応であり、猫が脅威を感じているときに見られることが多い。新しい猫または猫が居心地の悪い環境に対する反応なのかもしれない。

- 飼い主はスプレー行動を不適切な排尿と誤解することがしばしばあり、逆もまたしかりである。



猫にとってストレスは、多くの臨床検査の信頼性や解釈に影響を及ぼすだけでなく、疾患の徴候や治療に対する反応にも大きく関わります。

「清潔好き」である

猫は生涯の約4%（眠っていない時間の8%）の時間をグルーミングに費やす。猫がグルーミングをするという本能的な欲求は非

常に強い。猫は捕食動物であり、狩りをするために最高の状態を維持して獲物に忍び寄る必要がある、体のメン

テナンスは重要である。グルーミングは、外部寄生虫やその他に体に付着したものを、被毛についたニオイを取り除くために役立つ。猫は被毛

の動きに敏感で、周囲の状況や風向きなどを感じることができる。またグルーミングは、猫同士の社会的関係の維持を目的としている一面もあり、落ち着かせる行動として役割を果たしているようである。猫は潔癖症であるため、有害物質に暴露されている状態でもグルーミングしてしまう場合がある。本来なら決して猫が直接食べたり、飲んだりしないような物も含むことがある。

尿や糞便がニオイ付け行動に用いられるが、猫は居場所を隠すために、あえて埋めて隠すこともある。人にとって猫は、近くにいても不快感なく心地の良い動物であることが多い。猫は通常臭いはしない、また必要があ

ればトイレを上手に活用できるため、頻繁にトイレの掃除をするかは飼い主次第である。

猫は自身の尿および糞便を隠そうとすることが自然であり、適度に深いトイレを好む傾向がある。場合によっては、大型の植木鉢が最良のトイレとなりえる！研究によると、猫は排泄のために、1 cmの深さのトイレよりも、3 cmの深さのトイレを好むことが分かっている。同様にして屋外では、庭で新たに掘り返した領域や微細な砂利を敷いた場所の方が、固く押し固めた土より魅力的である。また、柔らかく、掻きやすい素材のトイレ砂を好むことが多い。

一般的に、家庭内では猫の数プラス1つをそれぞれ異なる場所に配置することが推奨されている。猫のトイレは定期的に清掃し、常にアクセスしやすい場所に置く必要がある。猫がトイレ以外の別の場所で粗相をする理由には以下のことが考えられる。

- 幼少期のしつけの失敗。
- 気に入ったトイレ場所が撤去された。
- 他の猫から攻撃されたことがある。
- 多頭飼いであり、家庭内で常に緊張感が絶えない。
- トイレの場所が嫌いである。
- トイレの砂が嫌いである。
- トイレ自体が嫌いである。
- トイレに関連した不愉快な出来事があった。（例えば、トイレの汚れ、騒音、投薬などで排

泄を中断されたなどのトイレの中にいる間に経験した恐ろしい出来事など）。

野良猫の場合は排泄する場所として、狩り、食事などの主な活動範囲から離している。また排尿と排便では、別の場所で行う傾向がある。飼い主はトイレの数を猫の匹数1にするだけでなく、食事の場所や往来が多い場所は避けるべきである。トイレは、人目に付かない静かな場所が理想的である。

動物病院として考えておくべきことは？

- 猫の排泄に関する問題行動が、病気に関係している場合がある。猫の排尿時や排便時に痛みがある場合、痛みがその行為にではなく別の部位と関連している場合も多くある。猫の加齢に伴って関節が強張りや、痛みを伴い可動域が狭くなる場合がある。以前は好んで使用していた深く囲いの高いトイレでさえも、使用が難しくなる場合がある。
- 単純な誤飲だけでなく、グルーミングを通じて毒物が口から体内に取り込まれる可能性がある。
- 毛並みや毛づやが悪い場合、猫がうまくグルーミングできていない、またはしたくないことの表れの可能性がある。これは歯科疾患、変形性関節炎、認知障害、甲状腺機能亢進症、不安症などが原因である場合がある。

- グルーミングには気持ちを落ち着かせる作用や、報酬効果もあると考えられており、転位行動として行っていることがある。
- 猫はトイレの容器から離れて食事をすることや、眠ることを好む。それゆえ病院のケージのサイズやトイレや食器などの配置によって、入院中の食欲およびリラクゼーションに影響を与える可能性がある。
- 猫はトイレの容器にこだわりがあることが多く、囲いのあるもの、あるいは囲いがないものを好む場合もある。

飼い主が知っておくべきことについて以下に示す：

- 猫にとって排尿や排便を行う際に好まれる場所とは、排泄後、容易に砂を掻くことができる場所である。その砂が猫にとって重く粗いもの、硬度が不適切であるもの、またはニオイがするものだった場合は全く使用しないことがある。トイレの容器は、猫が周囲を引っ掻き、向きを変え、容易に排泄物の脇をすり抜けることができるくらい大きさが適当である。排泄に関する問題行動を防ぐことができるでしょう。
- トイレの容器に強い香りが付いている場合や、強力な消毒薬などは、そのニオイが猫にとって不快である可能性が高い。

- 猫にとってトイレの配置は重要であり、食べ物や水から離し静かで、かつ猫が邪魔されることのない場所にするべきである。
- 多くの猫を飼育する家庭において、トイレの数が適当ではない場合がある。

自立的、感情的且つ警戒心が強い

猫は仲間を必要とせず、また単独で狩りや、隠れ家を見つけ、なわばりを守る。さらに自身を清潔に保ち、爪を研ぎ、周囲の状況をよく把握してその瞬発力および強さを用いて身を守る。危険に直面した際、闘争することも選択肢の1つである。

猫たちが共に生活する場所では、犬のようにはっきりした集団を形成する訳ではなく、猫のグループの間に優勢順位はな



© iStockphoto.com/Leslie Morris

い。猫には仲間が必要であるという認識は、猫の社会性に関する飼い主の誤解である。猫は集団生活を送ることができるが、野良猫の集団のような特定の状況下に限られている。こうした猫達は雌猫どうし血縁関係があって共に育った猫たちのグループであることが多く、また十分に食料とスペースがある環境に限定される。



猫は病気の症状や痛みを巧妙に隠します。その為、周りの関心を引かないようにじっと静かにたたずむ傾向にあります。飼い主は猫が苦しんでいることに気が付かない可能性もあります。

猫は病気や痛みの徴候を隠すことに長けており、周囲の注意を惹きつけないようにじっと静かに過ごす傾向がある。そのため、飼い主は猫が苦しんでいるのに気が付かない場合がある。

猫が飼い主や他の人と交流しようとするのは、猫は心身ともに満たされているためである。あなたの方に猫が近寄りやすいようにすると、猫にとっては安心できるだろう。また、猫が隠れるために高い所に登ることができるようにすることで、猫にとって安全で安心する場所を提供できる。

多くの人は、猫は無表情であるように捉えられており、そもそも感情を示す動物ではないと思われていることが多い。しかし、猫は生き抜くために、周囲の環境についてよく学び、食事の機会をうかが

ったり、素早く危険を察知したりしながら、他の動物と同様にして恐れ、喜び、不満などの感情をもっている。

猫は自分の能力を頼りに生きており、自立している動物であると言えるだろう。

動物病院にとってこれが意味することとは？

- 猫は動揺したり、恐怖を感じた場合には迅速に反応しようとする。しかし動物病院では逃げることはできないため、自己防衛のため攻撃に転ずる場合がある。
- 猫に対して、ゆっくりと静かにアプローチすることそしてアイコンタクトを避けること（ゆっくりと瞬きすること）で、猫の警戒心を最小限にすることができるだろう。
- 騒々しく甲高い騒音は、既にストレスを受けている猫をさらに驚かす場合があり、動物病院内では極力避ける。
- 猫の首筋をつかんだり、または乱暴に扱うことで、猫が恐怖心を抱いたりパニック状態に陥ったりする。
- 外科手術などの不快な経験を一回でもすると、将来的な来院にまでその影響を及ぼすことがある。



- 脅えた猫は逃げ出そうとすることが多いため、窓および扉の脱走防止策は必要不可欠である。
- 猫は痛みや病気の徴候を隠すことに長けている。飼い主は行動の変化には気付いているかもしれないが、病気と関連性には気付いていない場合がある。
- 興奮が高まっている徴候はわずかである。

飼い主が知っておくべきことについて以下に示す

- 猫は人に依存せず、また人と交流することを好まない。
- 猫は通常、「友達」を必要とせず、単独で生活することに満足している。
- 別の猫となわばりを共有することは、ストレスとなる。
- 猫は閉じ込められることや、体を摺り寄せて安心感を得ることを望まない場合がある。
- 我々の日々の生活において目に見えるもの、音およびニオイが猫のストレスとなりえる。
- 他の哺乳類と同様に、素早く学習することができる。大切な

ことは人への服従が知性の証ではないことということである！

- 猫の感情や行動が、急に变化する場合がある。動揺したり驚いたりしたときには、それに対して迅速に反応する。

- 猫の生活において、一貫し且つ日常生活において予測可能な行動をすると猫のストレスを減らし、質の高い生活の

質を維持できるだろう。

- 日常の行動の変化（睡眠時間が増えるまたは飼い主との接触を避けたがるなど）が感情的変化の結果であるか、健康の問題が生じている場合がある。

- 猫は清潔に保つことを非常に好むため、その機会が奪われると、強くストレスを感じる。

- 猫は病気や痛みの徴候を隠すことに長けており、周囲の注意を惹きつけないようにじっと静かに過ごす傾向がある。飼い主は、猫が苦しんでいることに気付かない場合がある。

幼少期の経験に大きく影響を受ける

猫によっては同居猫を全く受け入れようとしない場合もあるが、幼少期に社会化された場合、大部分の猫は人との交流を楽しむことができる。しかし、幼少期に人との交流を学んでいない猫の場合、人を受け入れることができないことがあ

る。生後2カ月以内の経験は非常に重要であり、成猫になってからの行動や反応にまで影響が及ぶことが知られている。リビングルームで平和に眠っている猫は人と交流することを除いては、屋外で自立して生活している野良猫と何ら変わらない。

子猫は生まれてから生後数週間のために、社会的アイデンティティおよび自分で食事を取る方法を学ぶ。母猫はお乳に吸い付くのを止めさせ、最初は死んだ獲物、その後は生きている獲物を食べるように仕向ける。この過程で、生き残るために必要な狩りをして獲物を仕留める方法を徐々に子猫に教えてゆく。また家庭環境でも、子猫は狩猟行動の練習をすることがある。叩いたり、追いかけたり、急に

飛びかかったりしながら学ぼうとしているのであり、子猫は多くの時間をこれに費やしている。オモチャやゲームを用いて子猫と遊ぶことで、我々は母猫や兄弟猫と非常に良く似た方法で彼らの発達に貢献できる。

約2カ月齢までは、子猫は環境および社会的結び付きを確立するために特に鋭敏な時期である。この「鋭敏な時期」の間のハンドリングの量と質について実施された研究から、正しい方法で必要な社会化を促すことには重要な役割を果たしている。生後2～7週齢の間に少なくとも4人の異なる人に触れた子猫は、このようなハンドリングの恩恵を受けなかった子猫よりも、人に対してより友好的である傾向がある。このとき、男性および女性、若齢者および高齢者が入り混じるべきであり、ハンドリングは短期間で頻回行うと良い。

これは人に限った話ではなく、子猫は「家庭内で暮らす」ということがどのようなものを理解する必要もある。騒音、子供、犬、掃除機、家とは違う場所および車での旅行などの経験を通じて、子猫はすべてが恐れるべき物ではないということ学ぶ。



子猫は成長しながら、性格を形成してゆく。この性格は、一部は遺伝子によって、一部は幼少期の経験によって、そして一部は環境およびどのように扱われたかによって決まる。また通常猫の性成熟は約6～9カ月齢で生じるが、子猫がどの季節に生まれたかによっても、性成熟が早まったり遅くれたりする場合がある。この時期から社会的に完全に成熟するまで（18カ月齢から4歳齢まで。平均して約2歳齢）、徐々に性格は変化しなわばり意識が強くなってゆく。場合によっては、社交的で自由奔放であった子猫が、単独行動を好み自立的で用心深い性格に変化することがある。

この時期は猫の生涯において、自分のなわばりの価値や生活能力を確認する時期でもある。雄の野良猫では、育てられたグループから徐々に離れる時期でもある。若い猫は他の猫との争いに巻き込まれ、家から離れて迷子になってしまう場合がある。この時期は、猫の飼い主にとって心配が絶えない時期でもある。この時期に去勢手術を行うことで、放浪癖を減らすことができるかもしれない。

動物病院にとって考えておくべきこととは？

- 野生化した猫を、扱うことは容易ではない。診察するには注意深く、家庭の猫とは異なったアプローチが必要である。

- 猫は幼少期に適切に社会化しなければ、人および周囲の環境に関連したストレスに対応することが難しくなる。つまり、脅えている猫をハンドリングする際には細心の注意が必要になる。また入院している猫がリラックスして食事ができるよう、隠れることができるケージだとより良い。

- 社会化を行うことができる時期は、生後8週目より前である。そのため動物病院は猫が極端に怯えないよう、ブリーダーや猫の飼い主、動物保護施設のスタッフに若齢の子猫に適切な経験をさせるように指導する必要がある。

飼い主が知っておくべきことに付いて以下に示す：

- 猫には特有の性格があり、すべての猫が親しみやすく、人と交流できる訳ではない。
- 臆病な子猫や、幼少期に正しい触れ合いがなかった猫にはできることに限界がある。しかし野生化した子猫でも、常に良いペットになれる可能性がある。

ここでは、猫の行動および飼い主や動物病院に対する猫の行動について、抜粋して紹介している。これらすべてことを心に留めておくことで、動物病院を訪れる猫に対して、ストレスが最小限となるように、キャット・フレンドリーに対応できるだろう。

